

MEDPark（メドパーク）

「AI時代の大学改革—教育と業務のリデザインを考える」

日時：2026年6月6日（土）14：30 ～ 16：30

座長：西城卓也（岐阜大学 MEDC）

講師：徳安達士（福岡工業大学）、森木銀河（会社員/gmoriki 代表）

対象

医療者教育に興味のあるかた。第27回 国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修参加者

概要

今回の教員・職員が一堂に会するセッションである MEDPark では、生成 AI をテーマとして取り上げた。生成 AI の急速な普及は、医療系大学における教育や日常業務の在り方を大きく変えつつある。いま求められているのは、新しいツールを導入すること自体ではなく、AI によって何が効率化され、何が新たに可能になるのかを見極めながら、人が担うべき判断や対話、責任の在り方をあらためて問い直すことである。医療系大学では、学生が AI 時代に必要な力を身につけることに加え、教職員自身も AI を適切に活用し、教育や業務をよりよく支えることが求められている。

その一方で、現場には期待と不安、利便性への注目と慎重な姿勢が併存しており、AI 活用をめぐる議論は、理念か実務か、教育か業務かという二項対立に傾きがちなところである。MEDPark は、こうした課題を教員だけ、あるいは職員だけのものとして切り分けるのではなく、教職員双方が集い、それぞれの立場から実践や課題意識を持ち寄りながら、ともに考える場である。

だからこそ本パネルでは、AI 活用を単なる便利な道具の話としてではなく、教育の質、業務の質、そして教職協働の在り方を問い直す契機として捉えたいと考えた。そのうえで本企画では、まず教育の側面から、AI をどのように学びに位置づけ、学習支援や教育設計のなかでどのように活用していくのかという論点に目を向ける。続いて、日常業務の側面から、AI を実際の業務改善や働き方の見直しにどのように結びつけていくのかを考える。教育と業務は本来切り離せるものではなく、両者を往還しながら考えることで、医療系大学における AI 活用の現実的な方向性がより鮮明になるはずである。お二人の実践から、AI 時代の大学のこれからの参加者とともに展望することを期待する。

セッション 1

AI の利活用と医療系教育の再考 —教育の構造化と可視化：失敗から育つ判断力—

講師：徳安達士（福岡工業大学）

セッション 2

「まず使ってみる」から始まる大学 AI 活用 —事務職員の現場から見えること

講師：森木銀河（会社員/gmoriki 代表）

報告概略

今回の MEDPark では、「AI 時代の大学改革—教育と業務のリデザインを考える」と題し、生成 AI の進展が医療系大学の教育と業務にもたらす影響を、多様な立場から考える機会として開催された。教員・職員が一堂に会し、教育と業務の双方の視点から AI 活用の可能性と課題について議論した。

前半は、福岡工業大学の徳安達士氏による「AI の利活用と医療系教育の再考—教育の構造化と可視化：失敗から育つ判断力—」と題した講演が行われた。徳安氏は、自身が取り組む AI を活用した医療機器開発や外科医の暗黙知の可視化に関する実践を紹介しながら、AI 時代における教育の本質について提起した。AI は知識の獲得や整理を支援する有用なツールである一方で、学習者の思考力や判断力、責任感を自動的に育むものではないと指摘した。その上で、教員主導の学習から学習者主体の学習への転換の必要性を強調し、安全に失敗できる環境の中で挑戦と内省を繰り返すことが、将来の医療者に求められる判断力の育成につながると述べた。また、自身の教育実践を通して、教員が教えすぎるのではなく、学生に学習の主導権を委ねることで主体的な学びや相互学習が促進されることを紹介し、AI 時代における教員の役割について再考を促した後半は、大学事務職員や大学 IR 専門職員としての経験をもち、大学向け AI 活用支援にも携わる森木銀河氏による「『まず使ってみる』から始まる大学 AI 活用—事務職員の現場から見えること」が行われた。森木氏は、大学教職員は AI の開発者ではなく利用者の立場であり、まずは実際に使うことが重要であると強調した。生成 AI は急速な技術発展とともに日常業務へ浸透しており、Microsoft Copilot をはじめとするツールがメ

ール作成や情報整理など様々な場面で活用されるようになってきていることを紹介した。一方で、AI は便利なツールであると同時に責任やリスクも伴うため、その特性を理解しながら活用する必要があると指摘した。講演では、AI を単なる作業効率化の道具ではなく「相棒」として位置づけ、自身の判断と AI に任せる部分との境界を意識することの重要性が語られた。また、大学においては、教員と事務職員がともに AI 活用について考え、ガイドラインや FD・SD などを通じて学内の共通理解を形成しながら、組織として活用を進めることの重要性が示された。

質疑応答では、学習者主体の教育への転換や教員の役割、教育への AI 活用、センシティブな情報を扱う際の留意点、大学内で AI 活用をどのように浸透させていくかなどについて、活発な意見交換が行われた。両講演に共通していたのは、AI を単なる便利な技術として捉えるのではなく、教育の質や業務の在り方、人が果たすべき役割を問い直す契機として位置づける視点であった。参加者にとって、AI 時代における大学の教育や業務をどのように再設計していくかについて考える貴重な機会となった。